

懇話会 2025 年第 2 回

企画委員会

NHK 大河ドラマ「蔦屋重三郎とその時代」を演題にして、会員の芳澤秀夫氏からお話いただきました。今回も軽快な語り口で、興味あるそして引き込まれるお話でした。太田南畝、恋川春町、山東京伝、曲亭馬琴、喜多川歌麿、葛飾北斎、東洲斎写楽などの歴史上の人たちの活躍が、あらためて印象深く感じられます。

日 時：2025 年 11 月 12 日（水）10:30～11:45

場 所：東京ボランティア市民活動センター A 会議室
（JR 飯田橋駅隣接セントラルプラザ 10 階）

参加費：300 円

参加者：8 名

10:00 開催挨拶 理事長

10:05 講演「蔦屋重三郎とその時代」

講師 寺社マイスター Y 氏

講師は軽妙なトークで、内容はもちろんのこと、会場と対話をしながらでしたので楽しい時間でした

現在の「蔦屋」と蔦屋重三郎の「蔦屋耕書堂」とは“まったく関係なし”から始まりました。ちなみに、蔦屋耕書堂は 1861（文久元）年に廃業しているそうです。

■蔦屋重三郎の足跡

1750（寛延 3）年～1797（寛政 9）年

徳川吉宗の子九代家重、田沼意次の時代、そして松平定信に至る激変の時代、江戸日本橋の版元として活躍し化政文化の一翼を担ったのが重三郎です。

田沼時代が派手であり奢侈が江戸社会の流れだった風潮から、転じて松平定信の質素倹約の「寛政の改革」での出版を含む娯楽などに関する風紀取り締まりが厳しくなった。この社会現象を捉えた重三郎は、松平定信の改革を風刺した黄表紙を世に出し空前の売れ行きとなった。しかし、政治風刺を含んだ黄表紙は、幕府から発禁処分を受け、処罰を受けた。

重三郎の神髄はこれを機会に戯作の出版を控え、書物問屋として出版事業に注力したことにある。大衆向けの「地本」、和算書・歴書・仏書・文法書・国学書などの「物之本」と云われる硬派であり学術書を出版することに業態転換した。

新分野の開拓もしている。喜多川歌麿による美人画の錦絵を企画し、大成功している。大首絵や半身構図で女性の心情が思い浮かぶようにして、江戸大衆を惹きつけた。しかし、江戸幕府はこのような趣向の出版を禁ずる方向になり、喜多川歌麿とは疎遠になった。

重三郎が凄いのはさらなる転換をして、東洲斎写楽を起用して役者絵を出版したことである。大判大首絵二十八図で、写楽をデビューさせた。が、この役者絵の人気は一時で終わった。

■蔦屋重三郎の時代

重三郎は新吉原大門前の茶店「蔦屋」に生まれています。「蔦屋」はその後貸本屋「耕書堂」を営み洒落本を刊行しています。貸本屋が、商いとして成り立つ社会情勢でした。

田沼時代は、商品生産や流通を積極的に支援しそこでの金融利益を幕府に還流させる積極財政を進めていた。一方、賄賂が横行する退廃現象を伴っていた。田沼が老中の時代には、旱魃、洪水、明和大火、浅間山噴火それによる大飢饉や一揆が激発していた。

松平定信は失脚した田沼時代を受けて、寛政の改革を進めた。賄賂とコネによる出世を排し、綱紀肅正・財政再建・農村復興・一揆や打ち壊しの防止が目標であった。

■講演を聞き、啓発を受けました

重三郎はメディア界の先駆者で、幕府の取り締まりにめげずに本の面白さを追い求める波乱万丈の、一本も二本も筋の通った人生をおくりました。

町人による出版文化が盛んになった田沼時代の派手賑やかな時代を迎え、次に一転して松平定信の節約の時代になり出版文化が制限される時代となっています。時代の荒波を乗り越えるバイタリティーとアイディアに敬意を表します。現代にも通じるビジネスの先見性を兼ね備えているようです。NHK ドラマへ輝きを添える、出色の講演でした。

11:30 情報交換 11:45 閉会

